

仏教讃歌の独語訳作成とその演奏

ガハプカ 奈美
竹内 公一

はじめに

2005年に筆者が京都女子大学に着任して初めて「仏教讃歌」の存在を知り、現在までに様々な仏教讃歌と出会った。その中には、日本音楽の中でも名高い作曲家も多く作曲していること。また、その作風は決して仏教のみを前面に押し出したものではないこともわかってきた。仏教讃歌の中には、むしろ、西洋音楽からヒントを得、同じく宗教を背景に持つ「賛美歌」や「聖歌」を原曲とするものも少なくなかったようである。

そして、「仏教讃歌」の多くは一般的にほとんど知られていないことも知り、日本人で、音楽をしかも声楽の研究をする筆者でさえ知らなかった「仏教讃歌」とはどのようなものか、また、仏教讃歌を理解するにあたって必要なことは何か、と考えた。

仏教讃歌は歌であるので、当然、楽譜があり、歌詞がついている。筆者は、まず、その歌詞を違う文化から生まれた言語に訳をすることによって母国語である日本語をより深く理解できると考えた。そこで、訳詩のほとんどない、ドイツ語に仏教讃歌の歌詞を訳することとした。

様々な宗教的背景があるが、本稿においてはその宗教的背景の問題点は考慮せずに、単純に本学の学生や、教員が耳にする機会があり、尚且つ、音楽的にも意義のあるものを筆者が選曲した。

本稿の目的は、日本人でも理解が難しい仏教讃歌をドイツ語に訳し、ドイツ人に対して演奏をすることにより、多角的な視点からその感受性を受け、演奏に活かしていくことにある。

1. 仏教讃歌について

(1) 歴史

仏教讃歌の歴史を「和讃」にさかのぼり考えたい。「和讃」とは、広辞苑によると、仏、菩薩、教法、先徳などを和語で讃嘆した歌。讃嘆に起こり、平安時代から江戸時代にかけて行われ、七五調風に句を重ね、親鸞は四句一章とした。源信の「極楽六時讃」「来迎讃」、親鸞の「三帖和讃」などが有名。とあり、親鸞の「三帖和讃」は、「浄土和讃」、「高僧和讃」、「正像末和讃」三部作のうちのひとつであり、親鸞が「教行信証」【漢文】を和文で表したのだ。と言われるほど、その内容は「教行信証」と変わらない。親鸞が最も大切とした教えを、日本語で、しかも七五調という、日本人にはなくてはならないリズムを使って綴ったものである。

和讃で一般的に知られているものというと、親鸞の、

如来大悲（によらいだいひ）の 恩徳（おんどく）は
身（み）を粉（こ）にしても 報（ほう）すべし
師主知識（ししゅうちしき）の 恩徳（おんどく）も
ほねをくだきても 謝（しゃ）すべし

があり、七五調で、四句一章の構成となっている。

さて、親鸞の用いた七五調のリズムは、日本最古の和歌集といわれる「万葉集」（759年成立）にそのリズムがある。万葉集の和歌は、現在の日本語のリズムの基となっており、現存の日本歌曲に用いられる詩にも多くその歌詞リズムは使用されている。

仏教讃歌の歴史は、比較的新しく、現在の楽譜の形となったのは、明治時代である。明治時代は、日本のグローバル化が目覚ましく、政治、学問、芸術を学ぶためにヨーロッパ留学をする者もあった。日本政府は教育においても力を入れ、音楽においても例外なく、ヨーロッパのいわゆるクラシック音楽の取り

入れに力を注いだ。そのような中でクラシック調の音楽で、なおかつ教科書となり得る曲などを収集した。そのような時代の流れもあり、音楽が目に見える「楽譜」という形で一般庶民にも普及をするようになった。仏教においても当時の作曲家が仏教の普及を目指して仏教讃歌という形で楽譜に書き残した。

簡単に仏教讃歌が現在の形になるまでを述べた。楽譜も普及し、様々な形で一般人が仏教に触れることが比較的容易になっているが、未だ仏教讃歌という存在が一般的に定着するには及んでいない。

(2) 本稿における研究

本稿では、前述のように、歴史的背景や宗教的背景の問題点は考慮せずに、音楽的にも意義のある曲と思われる7曲を筆者が選曲し、ドイツ語訳を行った。これまで、仏教讃歌を英語訳にしているものはあるが、それ以外の言語への訳はあまり進んでいない。

ドイツ語訳を行うことにより、楽譜の在り方の生まれたヨーロッパ、ドイツ語圏で演奏することが可能となる。そして、日本人以外で尚且つ仏教の背景を知らないヨーロッパの人々がどのような感覚を持って仏教讃歌を聴き、どの程度理解が可能であるのか知る機会と成り得ると考えた。仏教になじみのないヨーロッパの人々へのアプローチを広げることは、今後、日本での仏教讃歌を用いての活動の在り方を考える大きな機会を得るものである。

2. ドイツ語訳作成

(1) 共通認識

歴史的背景や宗教的背景については、今回は解説においてもほとんど触れずに、音楽と言葉での訴えに徹した。

言葉自体の意味についての採用は、次のような考え方で共通認識とし、訳詞作成および言語精査を行った。

仏は、広辞苑によると(仏の転「ほと」に「け」を付したもの、また「浮屠(ふと)

家]、「熱氣（ほとおりけ）」「缶（ほとき）」など語源に諸説がある）①悟りを得た者。仏陀（ぶつだ）。釈迦牟尼仏。②仏像また、仏の名号。③仏法（ぶつぼう）④死者またはその霊。⑤仏事を営むこと。⑥仏のように慈悲心の厚い人。（転じてお人よし）⑦大切に思う人。など7種類があり、ドイツ語では Buddha という事になるが、独和辞典によると（人名）仏陀、釈迦、仏（サンスクリット「悟りを開いた者」とあるため、ここでは、第1の意味を採用することとした。

次に礼拝（らいはい）は、広辞苑によると、神仏の前に低頭・合掌して恭敬の意を表すこと。とあり、ドイツ語では、Andacht もしくは、Gottesdienst という事になる。一般的に「宗教的集まり」＝「祈る場所」などという考えが Andacht にも、Gottesdienst どちらにもあるが、日々に行われ、一般家庭で使用している言葉は、Gottesdienst である。しかしここでは、特にキリスト教の「神」を思わせる、「Gott」を使用せずに、行為そのものに特化して考えるために、Andacht を採用し、訳詩（2）《衆会》とした。また、曲中1番の歌詞に、「讃仏の」とあり、広辞苑に、仏の功德を賛美すること。とあるので、ドイツ語では、称賛する。褒めたたえる。賛美する。の意味のある Preisen を採用した。次に2番の歌詞の「み教え」は①教える事。教育。②教える事柄。教訓。教義。などがあり、「法」は仏法。仏の教え。仏典。などがあるが、共に仏の教えを指しているので、ドイツ語では、Lehre ①教え。教訓。②学説。教義。などの意味を持つ言葉を採用した。

訳詞（3）《生きる》では、「ひたすら」を①ただそればかり。ひとむき。いちず。ひたぶる。②程度が完全なさま。すっかり。まったく。であるので、本来はドイツ語で「ernstlich」と直訳すべきだが、ここでは、「mit aller Sinnen」と「すべての思いで」と意識を加えた。また「あなかしこ」においては、現代語の「恐れ多い」をドイツ語で「wie herlich」とした。

訳詞（5）《御仏われと共に》においては、人称に対して共通の認識を持たねばならない。1番、2番とも最終行「みほとけ われと ともにあり」は本来、御仏と我はドイツ語では、「Sie」の関係でなくてはならないが、ここでは、何事

においても共に過ごし、共に感情表現をもしてくださる。という親しみを込めて、「Sie」なく、「Du」を使用し、「Denn Hoher Buddha , Du Du bist mit mir」とした。

(2) 問題点

そもそも考え方が違う文化であったり、宗教であったりするので、お念仏など訳できない言葉もあるという事が一番の難点であった。たとえば、訳詞(3)《生きる》には、「南無阿弥陀仏」という歌詞が出てくるが、これを訳詩の中に意識を込めて訳することは不可能であった。このような点は、その読みをアルファベット表記し、歌唱の前の解説によって、念仏である旨伝えた。

次に問題になったのは、仏や神に対する考え方が違うという事である。仏教では、それぞれが仏性を持っていて、それぞれが磨き、仏となることができる。しかし、キリスト教(今回はプロテスタントで考えた)では、イエス・キリストは一人であり、人はイエス・キリストに成り得ない。このようなことについては、演奏前の解説で少しは補ったが、理解して演奏を聴いてもらうには程遠い。

また、ドイツ語精査をするにあたって、祈り方にも違いがあることがわかってきた。

- ・仏教⇒困難に立ち向かう勇気を与えてほしい。(共に歩んでください)
- ・キリスト教⇒困難があったら根源を取り除いてほしい。(苦しみを取り除いてください)

などと祈り方にも大きな違いがある。また、言葉構成の違いとして、やはり訳詞(3)《生きる》にある、「生かされて 生きてきた 生かされて 生きている」の「生かされる」という言葉はドイツ語の訳詩を作成する際に一番の難解となった。

以上、特に問題となった4点を挙げたが、このような言葉に表れる比較については次稿に譲ることとしたい。また、演奏会での、共通理解を促すために、演奏の前後に口頭(ドイツ語)で解説を付け加えた。解説には、日本語で歌唱するため、まず訳詩がドイツ語の詩として成立しているか、成立させるために

どのような言葉を付け加えたか、言葉と言葉の間（休符）の日本的な意味や想像力を組み込んで聴けるような解説とした。

(3) 訳詩

(1) 聖夜

Heilige Nacht

- | | | |
|-----------|-------|---|
| 1. 星の夜空の | うつくしき | 1. Der Sternennächte Schönheit – |
| たれかは知るや | 天のなぞ | wer wird sie schon kennen, des Himmels
Rätsel |
| 無数のひとみ | 輝けば | Ungezählte Augen, die erglänzen. |
| 歓喜になごむ | わがころ | Im Staunen wird uns Friede
in unser'n Herzen. |
| 2. ガンジス河の | 真砂より | 2. An den Sandufern des Ganges |
| あまたおわする | ほとけたち | weilen in großer Zahl die Buddhas, |
| 夜ひるつねに | 守らすと | und bei Tag und Nacht geben sie uns
Schutz. |
| 聞くになごめる | わがころ | Als es mein Herz erfuhr,
fand es seinen Frieden. |

(2) 衆会

Andacht

- | | | |
|---------|---------|--|
| 1. この庭に | あつまるわれら | 1. In diesem Garten treten wir zusammen. |
| 世のわざの | しなこそかわれ | Was wir im Alltag tun, das alles ist
verschieden, |
| もろともに | めぐみにとけて | doch alle uns zusammen eint Sein Segen, |
| むつみあう | こころの声に | einträchtig stimmen wir von ganzem
Herzen an |

讃仏の	うれしきしらべ	und preisen Buddha in den frohen Weisen.
2. みすがたは	こころにうつり	2. Die Hohe Gestalt zeigt sich unser'm Herzen
み教えは	いのちにかよう	Die Hohe Lehr' rührt unser Leben an.
われらいま	闇よりさめて	Und da wir jetzt erwachen aus dem Dunkel
みほとけの	ひかりのなかに	vernehmen wir inmitten Seines Glanzes
法をきく	たのしきつどい	Seine Lehre in diesem frohen Kreise.

(3) 生きる

Leben

1. 生かされて	生きてきた	1. Mit Leben beschenkt, habe ich gelebt.
生かされて	生きている	Mit Leben beschenkt, lebe ich heute.
生かされて	生きていこうと	Mit Leben beschenkt, werde ich weiter leben -
手をあわす	南無阿弥陀仏	und falt' die Hände - NAMO AMIDA BUTSU.
2. このままの	わがいのち	2. So wie es ist, mein Leben,
このままの	わがこころ	so wie es ist, mein Herz -
このままに	たのみまいらせ	so wie ich nun bin, bitte ich Dich darum :
ひたすらに	生きなん今日も	mit allen Sinnen will ich auch heute leben.
3. あなかしこ	みほとけと	3. Oh, wie herrlich! zwischen Dir, Buddha,
あなかしこ	このわれと	und - oh, wie herrlich! - zwischen mir
結ばるる	このとうとさに	wird geschlossen der kostbare Bund.

涙ぐむ いのちの不思議 Tränen steigen auf über dies Wunder im
Leben.

(4) 散華

Blumen vor Buddha streuen

1. 輝く大空 緑の野山 1. An dem strahlenden Himmel
und über grünen Hügeln
- 光ゆたかに 朝日は昇る steigt in dem vollen Glanze
die Morgensonne auf.
- 仏の御姿 拝みまつり Zu der Gestalt des Buddha beten wir in Andacht,
- 香高き 花を散らして köstlich duftende Blumen streuen wir aus.
2. 天地蔽いし 暴風は消えて 2. Am Himmel und hernieden
legt sich der Windsturm
- 匂いほのかに 月かげ白し und in dem zarten Dufte
leuchtet weiß der Mond.
- 色も清き 花を散らして Rein ist auch die Farbe
der Blumen, die wir streuen.
- 讃えまつらん 大御力 Wir wollen Ihn preisen, Seinen großen Beistand.

(5) 御仏われと共に

Buddha ist mit mir

1. あわただしき わがよ わがころ 1. Hastig sind die Zeiten,
hastig unser Herz.
- にくみねたみ いかり あらそえど Ich hasse und ich neide,
ich zürne und ich streite,
- あしたしずかに たずぬれば doch wenn ich still am Morgen

den Dingen nachgeh',

おどろみだるる むねのうち

Ist in der aufgebrachtten wirren,
wilden Brust

すくいこのえの きこゆるを

Des Retters Stimme zu vernehmen.

みほとけわれと ともにあり

Denn Buddha, Du, Du bist mit mir.

2. おもいすてじ わがみ
わがいのち

2. Ich gebe nicht auf, nicht mich
und nicht das Leben

うらみそしり いたみ
かなしめど

Ich grolle und schmääh,
ich leide und ich trauer,

ゆうべひそかに もとむれば

doch wenn ich still am Abend
mich selber frage,

むぐらおいふす むねのそこ

Ist in der verwilderten Brust tief unten

真如の こえの ささやくを

eine überird'sche Stimme,
welche zu mir flüstert.

みほとけ われと ともにあり

Denn Hoher Buddha, Du, Du bist mit mir.

(6) 礼讃歌

Lobgesang

1. いづくにも ひかりいたらぬ

1. Wo's auch immer sei,

隈ぞなき 法の誓いの
ひろきめぐみは

es ist kein einz'ger Winkel,
den Licht nicht erreicht – so gelobte Er
uns all'n weit und breit den Segen.

2. みほとけの 誓のひびき
たかければ
およばぬ隈は 世になかりけり

2. Da des Buddha Gelöbnis mit hellem
Klange weithin tönt,
Ist auf Erden kein Winkel, den es nicht erreicht.

3. 安かりし

きょうのひと日を喜びて
み仏のまえに ぬかずきまつる

3. Voll Frieden war

heute der ganze Tag und in der Freude
Verneige ich mich vor dem Buddha tief zu Boden

4. かぎりなき

みひかりのうちに あるわれと
おもえば安し あけてくれにして

4. Ohne Grenzen ist

Sein Glanz, in dem wir sind.
Wenn ich's denk', find' ich Frieden
vom Morgen bis zum Abend.

5. あわれわれ

生々世々の 悪しらず
慈眼のまえに なにをあまゆる

5. Ah, wir Menschen hier,

Die vom mitgeborenen Übel nichts wissen —
was nur von Seinem sanften Blick
erhoffen wir uns hier!

(7) やさしさにであつたら

1. やさしさに であつたら

よろこびを 分けてあげよう

しあわせと おもったら

ほほえみを かわしていこう

海をふく 風のように

さわやかな おもいそえて

Wenn du auf einen lieben Menschen triffst

1. Wenn du auf einen lieben Menschen triffst,

Teile die Freude mit dem anderen!

Wenn du für ein Glück es ansiehst,

Tausche ein Lächeln mit dem anderen —

so wie der Wind, der über das Meer geht :

Mit einer frischen
Brise, die vom Herzen kommt!

2. さびしさを かんじたら

2. Wenn Einsamkeit dich überkommt,

だれかに 声をかけよう	Rede einen Menschen an!
ふれあいを たいせつに	Das Miteinander schätze hoch,
語りあう 友をつくろう	zum Gespräche suche dir die Freunde!
花の輪を つなぐように	Wie wir Blumenkränze ineinander flechten,
とりどりの おもいつないで	so verknüpft die Vielfalt all der Gedanken!
3. くるしみに であつたら	3. Wenn dich ein Leiden einmal heimsucht,
ひたすらに たえていこう	Dann nimm es hin mit viel Geduld!
合わす掌の ぬくもりに	Falte die Hände, daß du dich wärmst
ほのぼのと やすらぐこころ	und still und leise Friede einkehrt im Herzen.
かぎりない ひかりのなかに	Grenzenlos ist das Licht, in dem uns
生かされて 生きてゆく日々	das Leben gegeben ist und wir leben, Tag für Tag.

3. 訳詩作成にあたって

本章では、1 曲ずつ訳詞にあたって特に問題が生じた箇所についてどのように本研究において解決したか、その考え方を述べていく。

独訳にあたっては、単純に標準的な日本語と標準的なドイツ語を使用した。

(1) 《聖夜》

まず、「聖夜」は広辞苑によると、クリスマスの前夜。クリスマス・イブ。とある。また、訳にあたってどのような夜なのかを重要と考えドイツ語に置き換えた。

ドイツ語で Heilige Nacht というどうしても一般的にも、クリスマス時期の夜というイメージが強く、日本語の詩での仏教的に大切なもしくは重要な夜と

いうイメージを与えにくい。そのために口頭での解説にクリスマスとの関係は全く無い旨捕捉した。

次に「天のなぞ」を「des Himmels Rätsel」と直訳したが、日本語の「天のなぞ」のなぞには、荘厳さ、不思議さなどの意味を含んでいるが、ドイツ語での Ratsel は不思議さという意味も含んではいるが、一般的に使用される頻度が高いのは、「なぞなぞ」の意味であり、ドイツ人がそのイメージで取り違えてしまわぬように口頭解説で捕捉した。

2 番の歌詞では、「聞くになごめる わがこころ」を「Als es mein Herz erfuhr, fand es seinen Frieden.」= 私の心がそれを感じたとき 幸福をかんじるであろう（直訳）とした。日本語では、「聞く」（hören）があるが、ここでの聞くの意味は単に耳から入ってきた音や声を「聞く」のではなく、「聴く」の漢字がふさわしい、自ら望んで意識的に聞くという意味を込めて、ドイツ語では、erführen を使用した。

（2）《衆会》

この曲の題名、Andacht は日本語の衆会（同じ目的も持った人たちが集まり心ひとつにする）という意味を持ったものであり、訳をあてるのに全く問題がなかったが、同じ意味を持つ単語であるからこそ、そのイメージの観念を持たずに仏教讃歌を聴けるように訳詞を作成する際に、日本語の詩にはないが、ドイツ語の詩には、主語 Sein, Seinesなどを明らかに示した。特に、「法をきくたのしきつどい」には誰の法かという事が、日本語詩には明記がないが、ドイツ語では、Seine Leben と「誰」を明らかにすることにより、理解を促した。

（3）《生きる》

この曲は、今回の訳詞作成で最も困難であったものである。なぜならば、西洋の考え方には、《生きる》に詠われている「生かされている」という感覚がなく、相応しい訳が見当たらず検討に相当の時間を要した。そこで、少し目線を変えて、「生かされている」という言葉の意味を広く捉え、「命は贈り物である」という「Mit Leben Beschenkt」という訳をあてた。また、2 番において、「こ

のままに「たのみまいらせ」とあるが、「たのみまいらす」の対象が明確に示されていないため、(2) 衆会と同じように、より明確な理解を促すため「Dich」を示した。このことによって、3番の「あなかしこ みほとけと」の「zwischen Dir, Buddha」の Dir がより明確に浮き立って理解を促すことが可能となった。

(4) 《散華》、(5) 《御仏われと共に》

これら2曲においては、訳詞においては比較的明確に作成が可能であった。共通して、最終行の主語を補った。(4)《散華》において、「讃えまつらん御御力」を「Wir wollen Ihr preisen, Seinen grossen Beistand」。

(5)《御仏われと共に》において、「みほとけ われと ともにあり」を「Denn Hoher Buddha, Du ,Du bist mit mir.」。と下線部のように「Ihr」、「Seinen」、「Du」という言葉を補うことによって、祈りが向かう対象がより明確になった。

(6) 《礼讃歌》

この曲においては、他の6曲に比べると、意識を最も多くあてた曲である。まず、詩のリズムが一定であり、その美しさの中には、言葉の背景にある仏教的な意味や文化的な意味が多く込められている。これらをできる限り崩すことなくドイツ語でも意味が理解出来るように訳詞を作成することに大変な困難を感じた。例えば、3番の「きょうのひと日をよろこびて」の「ひと日」や、「み仏のまえに ぬかずきまつる」の「ぬかずきまつる」など感謝を向ける対象や感謝の向け方が全く違う文化の人々に理解を促すには工夫が必要だと感じ、相応しい訳をあて、尚且つ(1) - 1に触れた「万葉集」からの七五調、五七調のリズムにおいても口頭解説で捕捉した。

(7) 《やさしさにであつたら》

この曲は、筆者を含め、日本語を理解する者にとって、題目を理解するに不安はないが、訳詞を作成する際、「やさしさ」は誰のやさしさなのかをドイツ語では、明確にせねばならない。一番から三番までの歌詞を読むと、人と人の心のふれあいが詠われており、「人」の要素が強いと解釈したため、今回は、人のやさしさという解釈で、Menschen という言葉をあてたが、仏のやさしさ、実

際目に見えないやさしさ。とも解釈ができるであろう。また、3番の歌詞に、「ひたすらに たえていこう」とあるが、西洋には苦しみを甘んじて受け入れ、ただひたすら耐えるという考え方は難しく、今回は、「viel Geduld」、我慢するという言葉をあてた。

仏教讃歌のドイツ語訳にあたって、1曲ずつ全7曲を見てきたが、全体を通して、歴史的背景、宗教的背景の全く違う言語へ移行することは、大変難しく、更に理解を促すには相当な時間を要することが分かった。しかし、今回、7曲を独訳するにあたって、日本語とドイツ語の成り立ちや、考え方、大きく言えば、感性の違いなどを感じることができたことは今回の収穫であり、評価に値する。

4. むすび

筆者の音楽的興味から始めた本研究だが、様々な面で困難を感じ、文化の成り立ち、またその文化で育まれた言葉、または、宗教には、簡単に右から左へと置き換えられない何かが多く潜んでいることがわかってきた。その何かを知るにあたって、今回の媒体と成り得たのが、音であり、音楽であった。音、音楽という共通の媒体があるために、いかにその媒体を捉え、理解していくか、また何を感じ演奏をするかによって、人間の感性へ訴えかける力や、その心への浸透の力は大きく変化することを実際にドイツや日本で演奏することにより、強く感じた。(ドイツでの実演演奏会：平成24年8月22日及び8月28日行い、口頭でのアンケート調査を行った。また、平成24年12月15日には、日本で、一般の演奏ホールを使用して、一般の観客に仏教讃歌を用いた演奏会を開催した。ここでは、記述式アンケートを行った。)

本研究の目的である、演奏で日本語特有の音楽観を耳から捉え、同時にドイツ語訳詩及び解説で理解を促すことによって得られる感覚を多角的に得ることができた。

今後は、今回の研究で得た事を基にさらにドイツ語訳詩や解説の作成をし、音楽的視点から分析を進めていく計画である。

仏教讃歌の独語訳作成とその演奏

謝辞：ドイツ語への訳詩作成にあたりご教示、精査して下さいました Schauwecker Detlev 氏、ドイツでの演奏会を開催するにあたって貴重な教会をご提供下さった Kleinert Ronard 氏に感謝いたします。

- 文献：・飛鳥寛栗『仏教音楽への招待』本願寺出版社2008年
・ホアキン・M・ベニテズ「讃仏歌の創成と変遷」- 明治40～大正12年出版の讃
仏歌集及び『らいさん』の研究 - エリザベト音楽大学研究紀要22号
43-55 2002年
- 辞典：・広辞苑第五版
・クラウン独和辞典 三省堂第3版
・新コンサイス和独辞典 三省堂

〈キーワード〉

仏教讃歌 宗教 言語